

竜 崇正 (編著)

肝臓の外科解剖

門脈 segmentation に基づく新たな肝区域の考え方 (第2版)

藤元治朗

兵庫医大主任教授・肝胆膵外科学

私が竜崇正先生の『肝臓の外科解剖 第1版』を手にしたのはもう7, 8年前になる。学会での竜先生のお話を拝聴した後すぐに買い求め、まさに「目からうろこ」であった。それまでは Healey および Couinaud の肝区域分類が中心であり、肝静脈を基にした「肝癌取扱い規約」の区域・亜区域分類が一般的であった。しかし実際の肝切除においては、肝臓外科医はこれらが実情に合わないことを経験的に察知していた。すなわち、S5-S8 間、S6-S7 の画一的な境界などあるべくもなく、また中肝静脈に沿った main portal fissure に沿い肝を切離し、右肝のいわゆる「前区域枝・後区域枝」分岐に達しても、必ずしも前区域枝は頭・尾側1本ずつに分岐せずさまざまな分岐形態を有し、またこれらをテーピングして阻血領域をみると、Couinaud 分類とはかけ離れた症例が多々存在した。竜先生の本は大変新鮮で

「ああ、こういうことだったのか」と納得させられる内容であった。

2009年には日本語版の内容をさらに充実された英語版の『New Liver Anatomy』(Springer 社)を発刊され、さらに今回、日本語では第2版となる本書を上梓された。

本書では、多くの症例において前区域門脈枝(3次分枝)が頭側・尾側ではなく、腹側・背側に分岐する概念・事実を示された。また肝切除の鍵となる(1)中央入口(main portal fissure)、(2)左の入口(umbilical fissure)、に続く第3の扉である(3)右の入口(anterior fissure)がわかりやすく解説され、それにより、前腹側領域切除・前背側領域切除・左肝+前腹側領域切除・後区域+前背側領域切除、など極めて合理的な新たな概念の肝切除術式が提唱されている。これらは今後、再発様式の研究を経て、「系統的切除」と認識されると考えられる。

本書の礎となっているのは、豊富な症例と徹底した術前の美しくかつ正確詳細な画像解析に基づいた事実の検証である。ことに本第2版においては、肝静脈のドレナージ形態・尾状葉の詳細・右側肝門索・胆管の詳細・肝門板など、詳しく知りたい点についてわかりやすくかつ詳細に述べられており、「あれ、どうだったかな?」というときに必ず役に立ってくれる頼りになる1冊である。

本書はこれから肝臓外科を志す若い外科医には必須の書であり、またこれまでに多くの肝切除を経験されてきたベテラン医師にもぜひ読んで納得していただきたい素晴らしい1冊である。

●A4/頁240/2011年/定価12,600円
(本体12,000円+税5%)

[ISBN978-4-260-01421-2]

医学書院 刊